

生徒・学生の敬語に関する知識および意識に関する アンケート調査の結果

新潟市とその周辺にある小学校・中学校・高等学校の調査結果から

Elena Slyusareva

Abstract

This paper analyzes the students' attitude to the use of the honorific expressions, their actual usage of pronoun for a teacher and the changes in their usage corresponding to the developmental stages of the students.

For these purposes the author gathered data by compositions that were written to teachers by the students of different age groups. The entire data was gathered from elementary, junior and senior high school students in Niigata city and its surrounding areas. Based on the obtained data, the actual figure of honorific expression by students is considered.

キーワード.....敬語 自称詞 代名詞 言葉遣い

調査対象と方法

今まで 2 回にわたって、『現代社会文化研究』で（第 26 号は「話し言葉」編と第 29 号は「書き言葉」編）話し言葉及び書き言葉のデータに基づいて生徒の対教師敬語表現の使用の実態を検討してきた。今回は、アンケート調査の結果に基づいて、話し言葉と書き言葉のデータと比較を加えながら、生徒・学生の敬語に関する知識および意識態を考察したい。アンケートは、2001 年 8 月に実施した。アンケートに協力をお願いしたのは、新潟市と新潟市周辺にある小学校(2 校)、中学校(2 校)、高校(2 校)、大学(2 校)の生徒・学生、合計 839 名である。学年、男女構成を表 1 に示す。

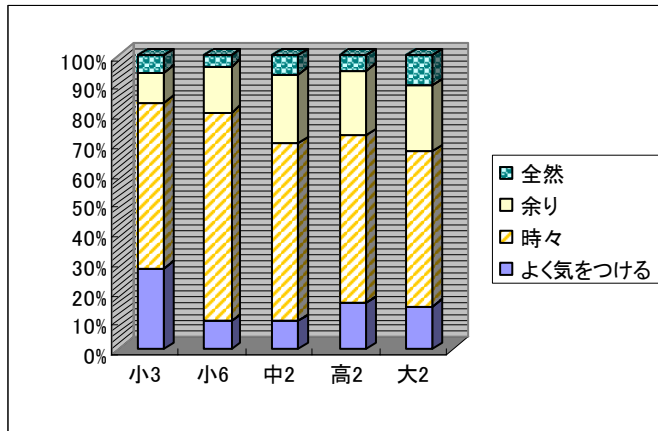
表 1 アンケート調査対象 (人)

	小学校 3 年	小学校 6 年	中学校 2 年	高校 2 年	大学 2 年	合計
男	29	30	108	96	201	839
女	37	30	105	58	155	
合計	66	60	203	154	356	

分析は二つの部分からなる。まず、第一部分(問1～5)では敬語と言葉遣いに関する一般的な項目を設定した。次の部分(問6)では相手に応じた言葉遣いの使い分けに関する質問をした。

問(1)「あなたは学校にいるとき、自分の言葉遣いに気をつけますか。」

図1 「自分の言葉遣いに関する意識」に対する全学年の回答



問1の回答結果を図1に示す。

問1における4つの回答の選択の内、「よく気をつけます」および「時々気をつけます」を一括して「言葉遣いに気を使うほうだ」と分類する。一方、「余り気をつけません」および「全然気をつけません」を一括して「無頓着なほうだ」と分類する。

学年ごとに見れば、小学校3年生(84%)、小学校6年生(80%)、

中学校2年生(70%)、高等学校2年生(73%)、大学2年生(68%)が「よく気をつける」または「時々気をつける」を選んだ。これは全体の約8割に相当する。それに対して、言葉遣いにわりと気をつけないと答えた生徒・学生は約2割であった。このことから生徒・学生が言葉遣いに関心を持っていることが窺える。

注目すべきは、言葉遣いに「よく気をつける」の回答率が一番高かったのは小3(28%)だったという結果である。さらに、小3の「よく気をつける」と「時々気をつける」とをあわせた回答率(84%)も全学年の中で一番高い。その理由は、おそらく、今回の調査対象となった5つの段階の中で、小学校3年生は家庭や学校で言葉遣いについて指導される機会がもっとも大きいからだと考えられる。

一方、言葉遣いに「余り気をつけません」および「全然気をつけません」をあわせた「無頓着なほうだ」の選択率は、小3(16%)、小6(20%)、中2(30%)、高2(27%)、大2(32%)である。興味深い点は、全学年の中で「無頓着なほうだ」が一番多かったのが大学生だったという結果である。大学生は自分の言葉遣いに関して自信を持っているからであると考えられる。これはおそらく大学という場がそれより下の段階の学校や一般社会に比べて、より一層自由な雰囲気を持っていて、学生たちは一定レベルに達した自分の言葉遣いをあまり意識することなく自然に会話しているということなのであろうか。

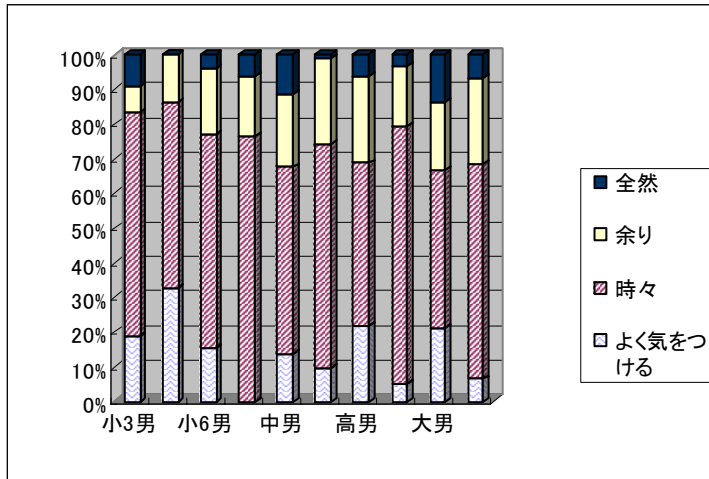


図2 「自分の言葉遣いに関する意識」に対する回答・学年男女別

男女比について言えば、「よく気をつける」と「時々気をつける」とあわせてのものである「言葉遣いに気をつけるほうだ」を選択した男子は(小3・84%、小6・77%、中2・69%、高2・70%、大2・67%)、女子は(小3・

86%、小6・75%、中2・73%、高2・75%、大2・69%)であり、男女ほぼ同率であった(図表2)。

問(2)「敬語について知っていること(たとえば敬語の種類とか)があれば、自由に書いて下さい。」

(自由記述欄に回答した回答場合は「ある」と見なし、空白、または「なし」と書いた場合には「ない」と見なした。自由記述の内容のレベルや正誤は問わない。)

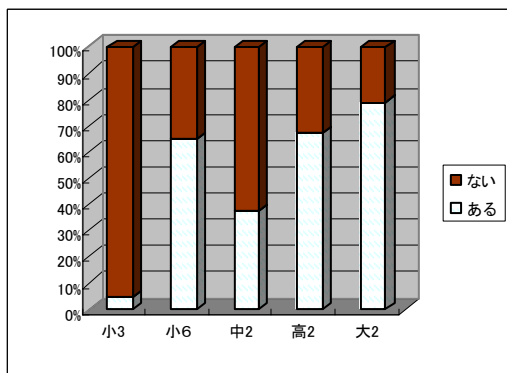


図3 「敬語に関する知識率」に対する全学年の回答

この図は、敬語に関する生徒・学生の知識率(厳密には知識量やその正しさに加えて、敬語に対する意識や態度が反映しているものと考えられる)を示すものとする。敬語について知っていることを書いた生徒・学生の率は、小3(6%)・小6(65%)・中2(38%)・高2(67%)・大2(79%)であり、「ない」、つまり回答しなかつた(空白、または「なし」と書いた)のは、小3(94%)・小6(35%)・中2(62%)・高2(33%)・大2(21%)である。

興味深い点は、敬語について知っていることがある、と回答した中2(38%)は小6(65%)と比べて約半分になったということである。小6と中2ではたった2年間しか変わらないのに、これほどの差が生じるとは驚くべきことである。中学2年生は敬語について得た知識を忘れてしまっ

たとは言い難い。それより、むしろ、このような結果は、中2という発達段階に固有の特徴起因するものである。おそらく、中2の生徒は自分の敬語知識に対して無関心あるいは否定的な態度をとっているのであろう。

小3は「敬語について知っている」としていくつかの具体的な例を挙げた。例えば、「お座りください」などである。

小6は「敬語について知っていること」として、主に敬語の対象「年上・目上の人に対して使う言葉である」、または敬語の具体的な例「いらっしゃいます」、「伺う」、「いたします」などを挙げている。

中2は敬語の種類「尊敬語、謙譲語、丁寧語」、敬語の具体的な例「いらっしゃいます」、「参ります、」など、敬語の対象「年上・目上の人」などを例として書いた。

高2と大2は「敬語について知っていること」として、敬語の種類、敬語の機能「相手を尊敬し、自分は謙遜する」を挙げている。

小6と中2のデータにおいて、アンケート調査の問2「敬語に関する知識」に関して得られたデータ(敬語の知識があると回答した小6は65%、中2は38%である)と、会話及び作文で彼らの言葉遣いの実際のデータを比べると興味深い現象が現れる(『現代文化社会研究』第26号と第29号を参照)。敬語の知識として、敬語が目上の人・先生に対して使う言葉である、と回答した小6と中2が多かった。しかし、小6・中2の会話の分析データでは敬語の使用は「デス・マス」丁寧語に限られていて、しかもその使用率は低かった(小6の敬体使用率は約24%である。一方、中2の場合は約26%である)。他方、書き言葉の場合、小6、中2のデータには尊敬語および謙譲語の使用があり、丁寧語の使用率が激増している(小6の敬体使用率は約72%で、中2の敬体使用率は約92%である)。小6、中2の場合、敬語についての彼らの知識の活用度合いが話し言葉では低いが、書き言葉では上昇することが分かる。このように、アンケートの問2から得られる「自分の知識の有無に対する意識」と彼らの実際の場面での彼らの敬語使用・不使用との間にはかなり差があると言える。

問(3)「あなたは、敬語のことをどう思いますか。」(複数回答可)

- a 敬語は美しい言葉だから、大切だと思います。
- b 敬語は社会、学校、クラブなどでの人間関係を気持ちのよいものにすることができるので必要だと思います。
- c 敬語は昔から日本語にあるので、残しておいてもよいと思います。
- d 敬語は難しそうだから、ない方がよいと思います。
- e 敬語はかえって人間関係を悪くするから、ない方がよいと思います。
- f 敬語はあった方がよいのか、ない方がよいのか分かりません。
- g その他 _____

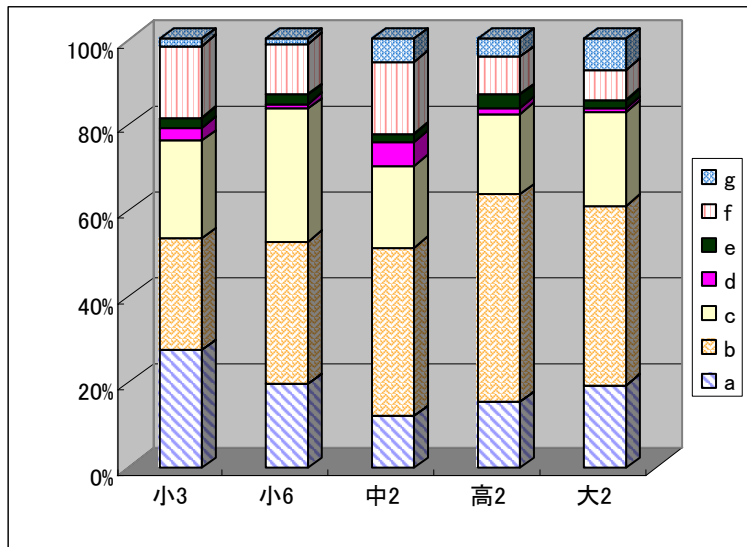


図4 「敬語に対する価値評価」に対する全学年の回答

敬語についての価値評価は、(a)、(b)、(c)の「敬語は必要であり、あったほうが良い」と回答した生徒・学生が小3(76%)、小6(84%)、中2(70%)、高2(83%)、大2(83%)にのぼり、(d)・(e)の「敬語はないほうが良い」と回答し

た生徒・学生(小3(5%)、小6(3%)、中2(20%)、高2(4%)、大2(3%))を圧倒した(図表4)。大部分の生徒・学生が敬語の存在意義を認めていると言える。

問3から得られた結果をさらに詳しく検討すると、いくつかの注目すべき点が現れる。例えば、選択肢(a)に関する中2の回答率は一番低かった(12%)。同時に、全学年の中で彼らの選択肢(d)における回答率がもっとも高かった(18%)。このような結果から、中学生はいわゆる社会通念に対してより否定的な発達段階であると言えるだろう。

次に、選択肢(b)について見てみよう。注目すべきは、学年が高くなればなるほど、生徒・学生の回答率は高くなる(小3(26%)、小6(34%)、中2(39%)、高2(49%)、大2(42%))ということである。生徒・学生は先生との人間関係を意識しているだけではなく、同級生、先輩・後輩との関係にも非常に敏感であると考えられる。この選択肢に関する最も高い回答率は高校2年生(49%)の場合である。年齢的な特徴として、高校生は直面する人間関係にもっとも敏感な発達段階にあると言えるだろう。

一方、選択肢(c)の回答率は小3(23%)、小6(31%)、中2(19%)、高2(19%)、大2(22%)であり、小学校6年生が他の学年を上回っている。対教師会話では敬語使用率が極めて低かった小6であるが、この選択肢への回答は意外に彼らが保守的であることが示している。

一方、選択肢(e)、(f)の回答率は思ったより少なかった。選択肢(f)に関して最も回答率が高かったのは小3(17%)と中2(17%)であった。この結果は興味深い。小3は敬語に対する知識が乏しいため(f)の回答率が高かったと思われる。しかし、中2の場合、敬語についての知識の不足というよりも、敬語に対する態度が理由であると考えられる。彼らの自由意見「敬語を使うと堅苦しさが生じる」、「もっと楽に話したい」などから分かるように、彼らは敬語の必要性をまだ充分に見出してないと言える。

他方、問3で(g)「その他」を選んだ小3や小6の自由意見にはあまり見るべきものがなかったが、中2、高2、大2の自由意見からは、彼らが敬語の機能をはっきり認識し、時代の変化に伴う敬語の変化を指摘し、敬語の用法の問題点を挙げていることが分かる。

問(4)「最近、特に若い人たちが敬語を使わないと言われていました。あなたはその理由が何だと思いますか。」(複数回答可)

- a 敬語を知らないから
- b まわりの友達が使わないから
- c まわりに尊敬できる人がいないから
- d 敬語を使う機会がないから
- e その他

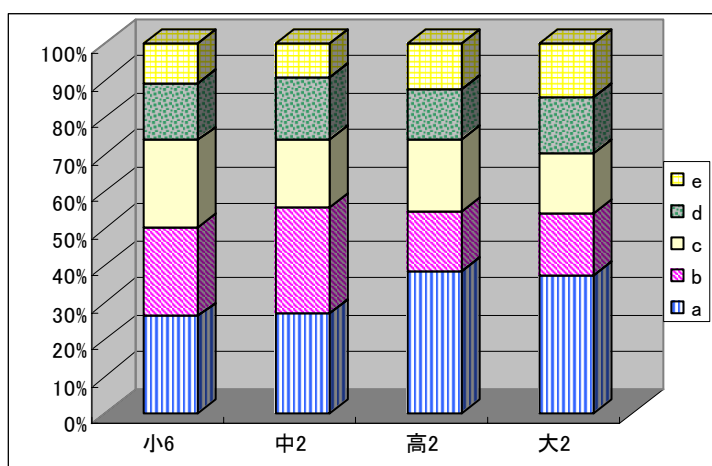


図5「敬語の若者が使わない理由」に対する全学年の回答

問4は若者の敬語不使用についての客観的な意見を伴ったものである。生徒・学生本人の不使用の理由を尋ねたものではない。しかし、生徒と学生の回答には、本人の敬語不使用に対する内省的な判断も反映されて

いると考えられる。

敬語の不使用の理由に関する、生徒・学生の回答は図5に示すとおりである。問4の場合、小学校6年生以上の生徒たちに回答をしてもらった。小学校3年生には難しすぎると判断したためである。

若者による敬語の不使用の主な理由として、一番多かったのは小6(26%)、高2(39%)、大2(38%)であり、中2は1番目の理由として選択肢(b)「まわりの友達が使わないから」(29%)を回答した。選択肢(a)は2番目(27%)だった。選択肢(b)については、小6(24%)、高2(16%)、大2(17%)であった。このように(b)を選んだものは全体として多かったことは、周りの人と同調したいという傾向が強いからなのであろう。選択肢(c)について見れば「尊敬できる人がいない」(小6(23%)、中2(19%)、高2(19%)、大2(16%))であり、選択肢(d)「敬語を使う機会がない」について(小6(16%)、中2(16%)、高2(14%)、大2(15%))であった。

選択肢(b)に関しては、回答率は中2が一番高かった(29%)。この結果も注目すべきことである。中学生にとって仲間との相互関係は心理的に極めて大きな比重を占めていると思われる。ものの考え方、行動、言葉遣いにもそれが影響していると思われる。つまり、中2の選択肢(b)

の回答率の高さの理由としては、仲間関係の調和を重視しているということを考えられる。

一方、選択肢(c)の回答率は思ったより低かった。「敬語は目上の人に対して使う言葉である」、「社会常識、マナー」として、敬語はとても重要な言葉である」などのような自由意見が多かった。今回の調査の過程で調査者は問4と同趣旨の質問を、生徒と調査者の会話の中で行ってみた。

エ 最近、上下関係の代わりに親疎関係、親しいか、そうではないか、という関係が優先なっています。目上の人であっても、あまり尊敬できなければ言葉でも「尊敬していない」という気持ちを表す。一方、逆、親しくない人と距離を置きたいときに、言葉に気を付けて、より丁寧になります。

男子1 ありますけど。取りあえず、尊敬しなくても、尊敬しても、やはり、言葉に気を付けます。

(新潟市内F高等学校2年生。録音した会話から。「エ」は著者「エレナ」を意味する)

このような生徒・学生の意見が大きくなると共に、また学年が高くなればなるほど、選択肢(c)の回答率が低くなる(小6(23%)、中2(19%)、高2(19%)、大2(16%)。このことから、生徒・学生は敬語の使用が必ずしも「敬意」と直接的に結びつくものではないということを知っていることが分かる。

選択肢(e)における生徒・学生の様々な意見の中には、「敬語の使用によって生じる堅苦しさ」、「上下意識の薄弱さ」なども挙げられているが、一番多かったものは「敬語についての知識、および礼儀の不足」という理由であった。

問(5) 「あなたは、敬語について勉強したいと思いますか。」

a はい

b いいえ

「敬語について勉強したい」と回答した生徒・学生は小3(46%)、小6(51%)、中2(33%)、高2(45%)、大2(52%)であった。選択肢「b」「敬語について勉強したくない」¹⁾を選んだ生徒・学生は小3(54%)、小6(49%)、中2(67%)、高2(55%)、大2(48%)だった。

「敬語について勉強したい」の理由は、「敬語が伝統的な言葉遣いであり、敬語を知ることによって、会話が広がる」などのようなものが多かった。選択肢「b」「敬語について勉強したくない」と回答した生徒・学生の理由は、「敬語の必要性を見出さない」、や「敬語は勉強するものではなく、自然に身に付けるものである」などの意見が多かった。

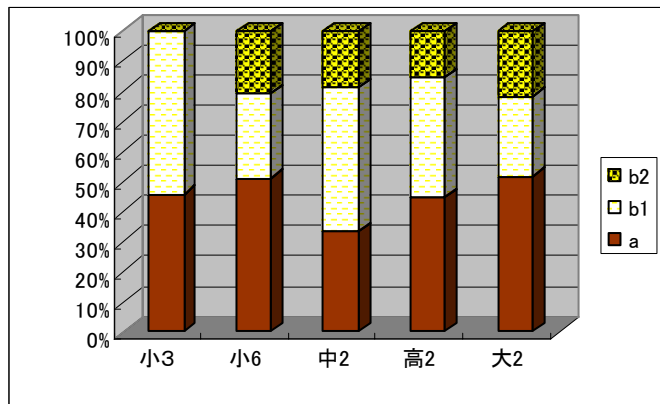


図6 「敬語について勉強したいか」に対する全学年の回答

図6では、選択肢「b」に関する生徒・学生の回答を「b1」と「b2」に分けた。「b1」は敬語の必要性を認めない、あるいは敬語の必要性を認めても、勉強に関心がないという理由で「いいえ」にした生徒・学生の回答率である。そして、「b1」には「敬

語は自然に身につけるものである」という意見も含まれているため、「b1」はすべて「敬語は必要が無い」という意見だけであると言うわけではない。「b2」は、現在まで敬語を勉強して、使い方が分かっているため、それ以上勉強する必要がない、と答えた生徒・学生の回答率であり、小6から大2までのすべての段階のデータ中に見られる。「b2」の回答率は、小6(21%)・大2(22%)であり「b」の約50%を占めている。中・高の場合、中2(19%)・高2(24%)であり、「b」の約28%を占めている。

・相手に応じた言葉遣いの使い分けについて

問(6)「あなたは、次の人と話すとき、自分のことをどのように言うことが多いですか。(一番多い言葉を下の『ボク、ワタシ、オレ、アタシ、自分の名前、その他(愛称など)、ジブン』内から一つだけ選ぶ」

選択肢は次のとおりである。

- a)よその知らない人、 b)後輩、 c) 親しい友達、
 d)親しくない同学年の人、 e) 先輩、 f) 先生、 g) 母、 h) 父

以下の図9～18で示すように、相手が変わればそれぞれの自称詞の使用率が変わってくるのが明らかである。今回は、紙幅の都合で、生徒・学生による自称詞の使用の一端についてのみを示すことにする。まず、教師に対する自称詞の使用(f)を検討し、続けてそれ以外の人に対して使う自称詞(使用率の高いもののみ)について分析し、対教師自称詞と比較する。

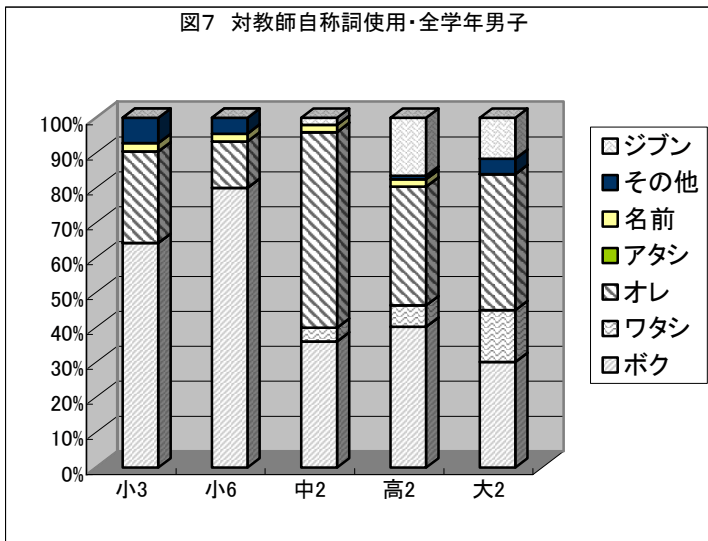


図7 対教師自称詞使用・全学年男子

男子について見ると、よく使われている表現は「ぼく」(小3(65%)、小6(81%)、中2(36%)、高2(41%)、大2(30%))と「オレ」(小3(26%)、小6(13%)、中2(56%)、高2(34%)、大2(39%))であることが分かる。とりわけ「オレ」は、中2で56%の男子生

徒が使っている。「ボク」は、小3で65%、小6では81%を占めるが、中2で36%、高2で41%、大2では30%にまで落ちる。学年が上がると共に「ボク」という表現から「オレ」への進行が見られる。小学生による「ボク」の使用率が圧倒的に高いことに注目されたい。同時に、「ジブン」(中2(2%)、高2(16%)、大2(12%))と「ワタシ」(中2(4%)、高2(6%)、大2(15%))が使われるようになっていく。特に、中・高・大の3段階では「ワタシ」も表れるが、その率は低いと言う結果が出た。まだ社会に出てない中2男子・高2男子・大2男子にとって自称詞「ワタシ」はまだ充分使用語彙になってないと言える。図表13~18では、中学校~大学の「ジブン」と「ワタシ」の使用率を示した。相手が(a)「よその知らない人」と(e)「先輩」と(f)「先生」の場合、これらの自称詞の使用率が上がっている。これらの自称詞の全体的な使用率は大きくないが、ピークが対教師(f)や対未知の人(a)になっている。

一方、高2と大2の対先輩(e)自称詞「ワタシ」や「ジブン」の使用が特徴的であると考えられる。学校生活やクラブ活動という先輩後輩の上下関係の中で使われる傾向にある表現と言える。ここで、図表7、図表13~18での中2~大学2の「ワタシ」と「ジブン」の使用に関する結果と、図表4での選択肢(b)「敬語は社会、学校、クラブなどでの人間関係を気持ちのよいものにすることができるので必要だと思います」に関する回答を相互参照すると、興味深い結果が現れる。学校での先輩・後輩関係を重視する中学生~大学の生男子は、問5(図表4)に対して圧倒的に選択肢(b)を選んだ。この結果と、図表13~18で見られる、中2~大2の男子による「ワタシ」と「ジブン」の使用率が一致している。

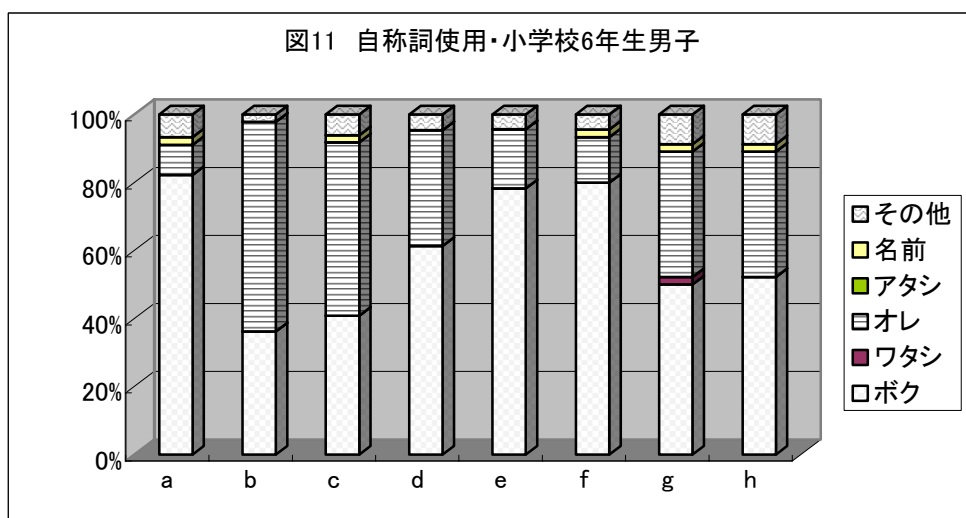
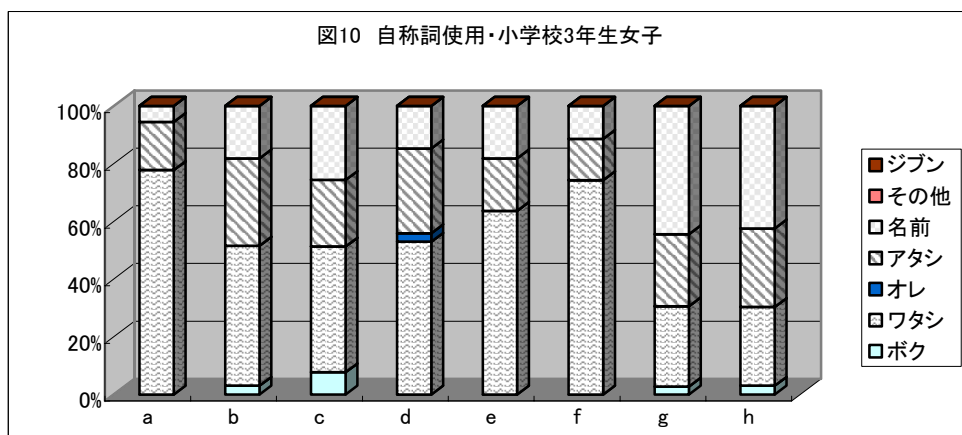
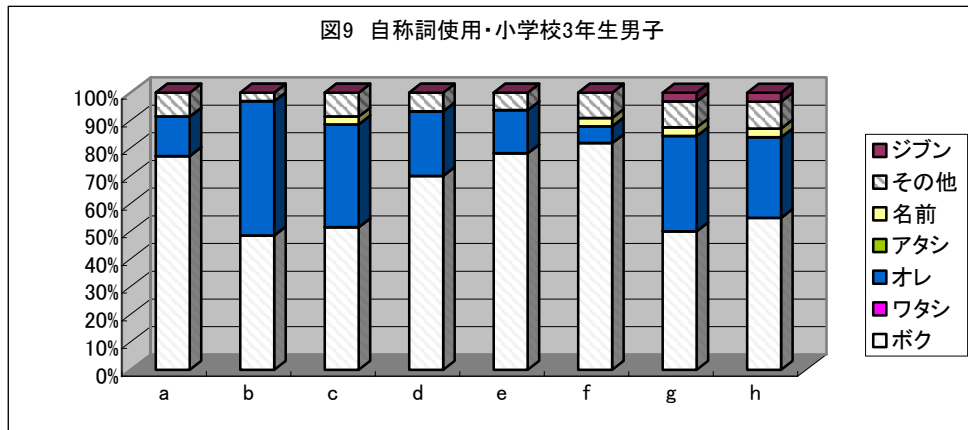


図12 自称詞使用・小学校6年生女子

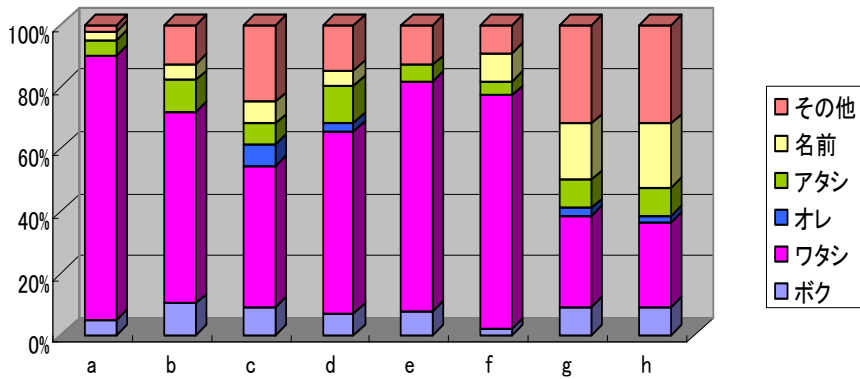


図13 自称詞使用・中学校2年生女子

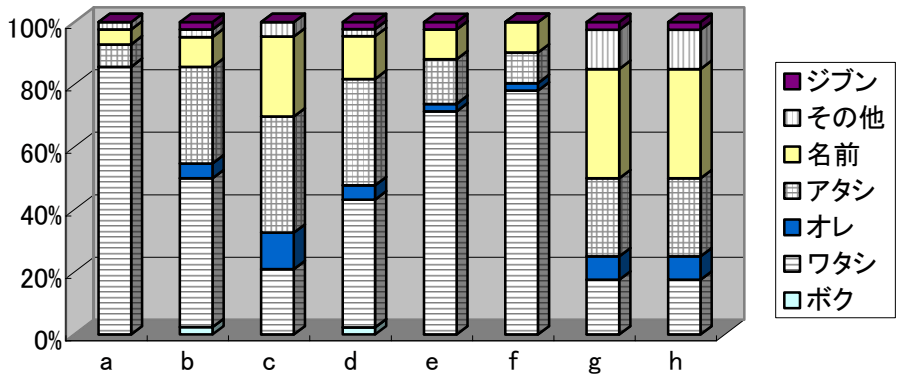
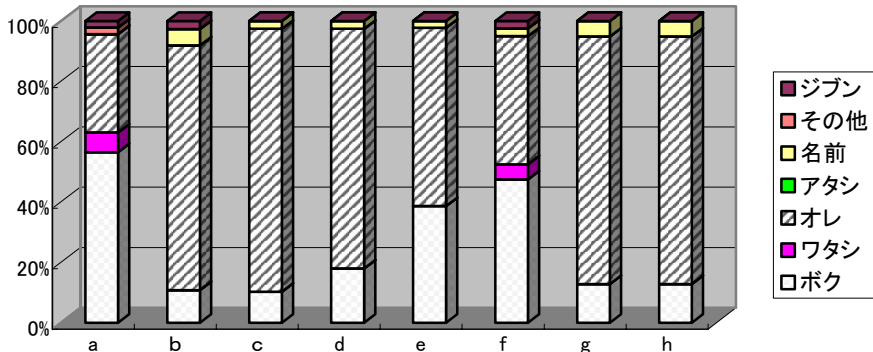
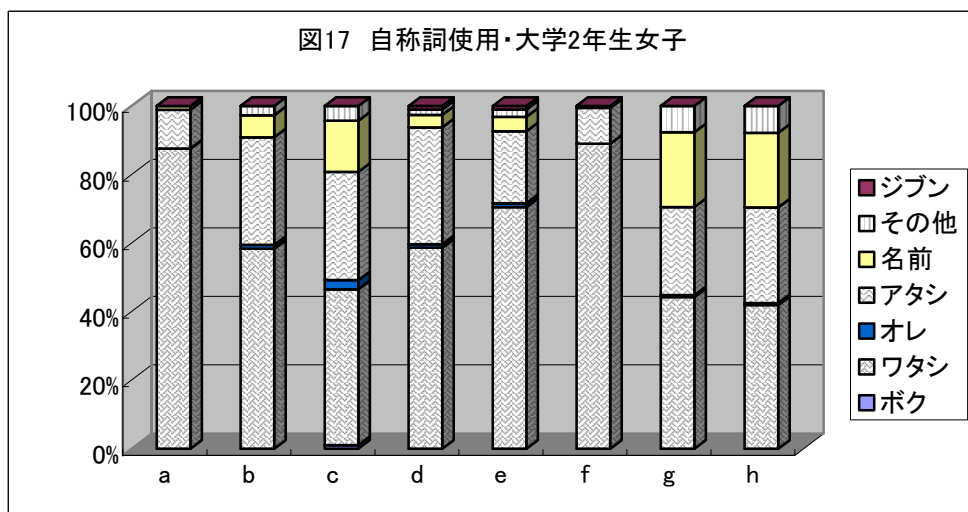
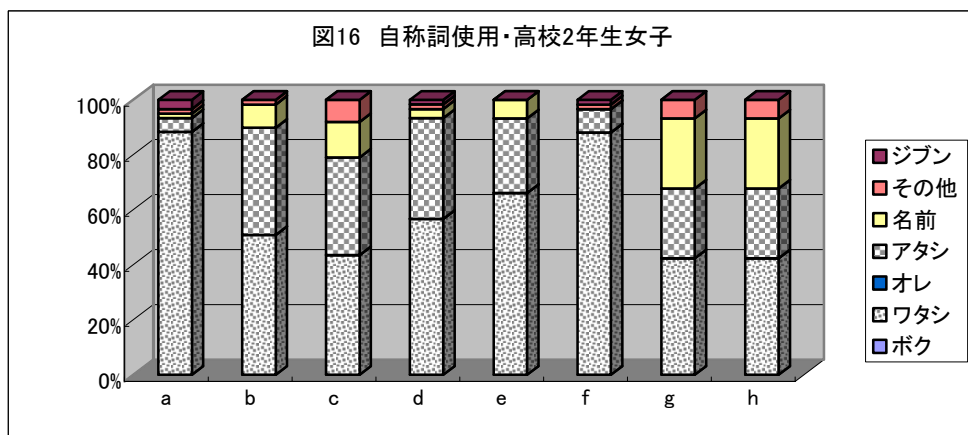
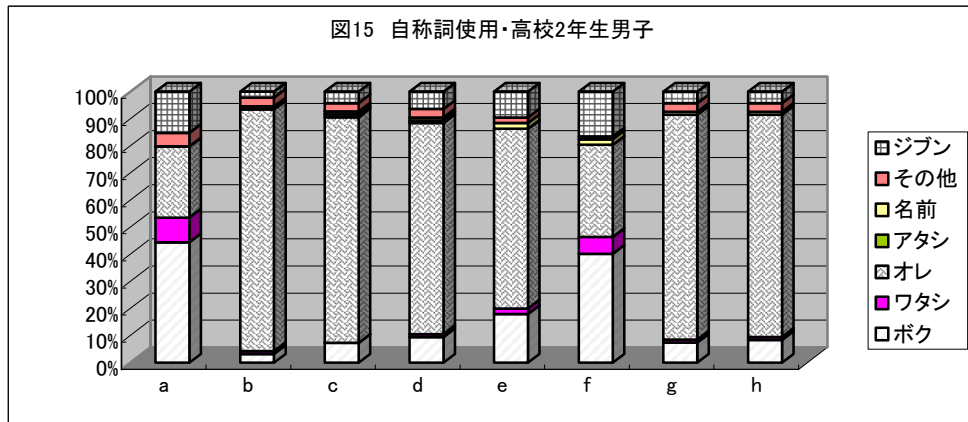


図14 自称詞使用・中学校2年生男子





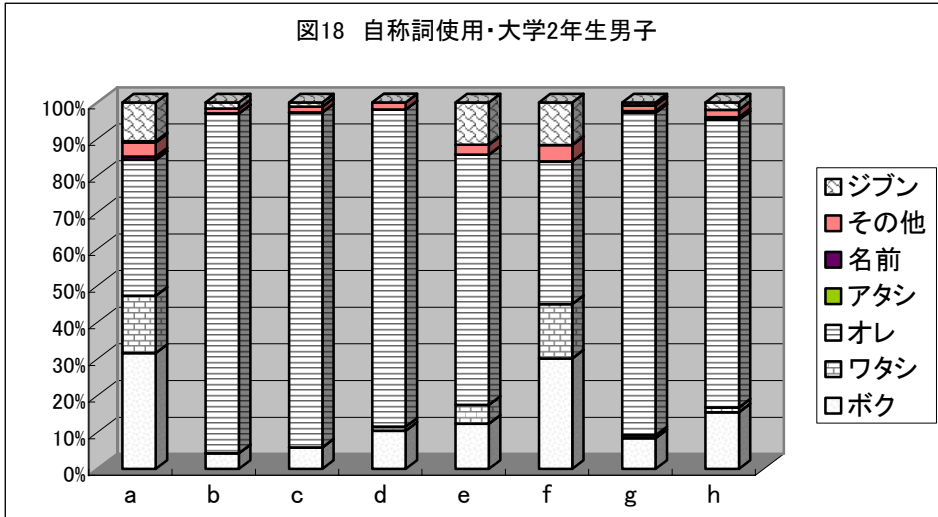
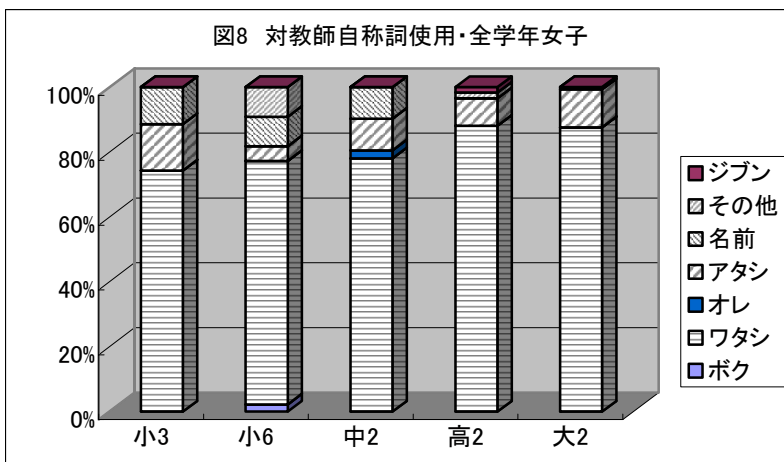


図7に示した、アンケート調査の結果としての全学年男子の対教師自称詞使用と、すでにこれまでに検討した会話や作文の中で彼らによって実際に用いられた自称詞を比較して見よう。

話し言葉の場合、生徒・学生による自称詞使用数そのものが低かったが、用いられた自称詞はほとんどアンケートの結果と合致する。会話に比べて、作文中の「ワタシ」使用の増加率は中2から大2まで学年を追って大きくなった。それは図7で見られる「ワタシ」の漸増的使用率(中2男子(4%)、高2男子(6%)、大2(15%))と驚くほど一致していることである。これは注目すべき結果である。言い換えれば、中学生～大学生の「ワタシ」は、図7では率は低いものの、改まり度の高いコミュニケーション場面である「書き言葉」の中でもっともよく使用される自称詞である。



女子について次の図8を見てみよう。女子の場合、相手が教師であるときに、最もよく使われるのは「ワタシ」であり、8割前後を占めている(小3(75%)、小6(75%)、中2(78%)、

高2(88%)、大2(87%))。女子が使用するには不適切だと非難される「ボク」や「オレ」の使用

は、図 10～18 で見られるとおり、対後輩(c)、対親しい友達(d)、対親(g、h)という最も気楽な場面でさえ非常に少ない。

なお、男子ではほとんど使われない「自分の名前」が、女子では、相手が教師である場合でも、回答の中に入っている(小3(11%、小6(9%、中2(10%))。ただし、高校女子や大学女子ではそのような子供っぽい自称表現から脱却していると窺える。一方で、教師に対して「アタシ」は全学年にわたって用いられていることは興味深い。

図 10～18 で見られるように、「ワタシ」は相手が(a)「よその知らない人」や(e)「先輩」、(f)「先生」になるとその使用率は他の項目よりさらに増加し、約 7 割になる(対よその知らない人：小3(77%)、小6(85%)、中2(86%)、高2(88%)、大2(88%)、対先輩：小3(64%)、小6(75%)、中2(72%)、高2(66%)、大2(71%)、対先生：小3(75%)、小6(70%)、中2(78%)、高2(88%)、大2(87%)。)

これと逆の関係にあるのが図 10～18 の「アタシ」である。対よその知らない人や対先生での使用率は約 1 割にまで落ちる。相手によって「ワタシ」と「アタシ」の使い分けが見られる(図 10～18)。話し相手が(c)親しい友達、(g)母や(h)父である場合、「アタシ」の方が大きくなる。女子の場合「ワタシ」は目上に対して使える中立的な表現であり、これに対して「アタシ」は親しさを付加した表現であると言える。

一方、「名前」の使用も女子に特徴的であった。相手が(a)よその知らない人や(f)先生になると「名前」の使用率が低くなる(小3～中2：約 7%)、またはほとんど使われなくなる(高2と大2：約 1%)。「名前」も親しい相手との会話でのみ使われる傾向の強い表現であると言える。

話し言葉と書き言葉における女子の生徒・学生の対教師自称詞の使用と女子のアンケート調査の結果とを比較すると、女子の生徒・学生の自省に基づく自称詞使用のデータであるアンケート結果と彼女たちの会話や作文から出た実際の使用のデータはほとんど一致する。

おわりに

以上、生徒・学生の敬語に関する知識および意識に関するアンケート調査で得られた結果のいくつかを検討した。明らかになったことは次のとおりである。

まず、自分の言葉遣いに気をつけるほうである、と回答した生徒・学生が比較的多かったということである(全学年にわたって 80%前後を占めている)。このことから生徒・学生が言葉遣いに関心を持っていることが明らかになった。

小3と中2を除く、他の学年すべてを平均すると「敬語について知っていることがある」と回答した者は約 70%であった。小3生が敬語の知識に乏しいのは当然としても、中学2生の低い回答率(38%)は意外である。このことは、中2生が敬語を知らないのではなくて、知っている、知っていることを認めたくないという意識関係があるようようである。さらに、中2生

の敬語知識の有無に対する意識と彼らの実際の使用との間には差があることも分かった。

生徒・学生の「敬語についての価値評価」を問3で調べた。しばしば聞こえる「若者が敬語を放棄してしまうのではないか」という非難や懸念を否定するかのようになり、今回のアンケート調査の対象になった生徒・学生は「敬語は必要であり、あったほうが良い」という意見を支持した。それは全学年の回答率の約80%を占めたのである。大部分の生徒・学生が敬語の存在意義を認めていることが明らかになった。さらに、敬語支持理由の中で選択肢(b)の回答率が最も高かった(全学年の回答率の約40%を占めた)。このことは、学年を問わず、生徒・学生は教師や他の大人に対してだけでなく、同級生との親疎関係や先輩・後輩などの上下関係に敏感であり、それらの関係の中での言葉遣いを重視していることを示している。

問4では若者の敬語不使用についての客観的な意見を調べた。学年ごとに、生徒・学生の回答には興味深い変化が見られる。小学校6年生と中学校2年生は仲間との関係の調和を重視していることが明らかになった。実際に、いろんな場面で敬語を使う経験を持っている高校2年生と大学2年生は、敬語の難しさを挙げている。他方、「まわりに尊敬できる人がいない」という選択肢の回答率は、学年が高ければ高いほど、漸減している。生徒・学生は敬語の使用が必ずしも「敬意」と直接的に結びつくものではないということを知っていることが分かった。

問5で調べた「敬語について勉強したか」という問に対して、すべての学年を平均すると約50%の生徒・学生は「勉強したい」と回答した。残り(「勉強したい」と回答しなかった者)の50%は「すでに敬語を知っている」と回答した。さらに、「敬語について勉強したくない」と回答した者の中に「敬語は自然に身につく」という意見を書いた生徒・学生も多かった。つまり、積極的な関心がないということである。このことから、生徒・学生の大部分は敬語の必要性を認めていることが分かった。

生徒・学生の対教師自称詞使用を、学年や男女別、に考察した。成長過程と共に、教師に対して用いられる自称詞には変化が見られた。自称詞の使用に関して、会話・作文の分析結果とアンケート調査の結果には同様な傾向が現れた。

他方、興味深いのは、各発達段階での自称詞使用の種類に見られる変化ということである。一番多く種類の自称詞を用いているのは小6と中2である。その理由は、小6や中2が自己表現のために様々な方法を試したりして、その内の一つは自称詞の多様であるだろう。

<注>

- 1) 選択肢「b」「敬語について勉強したくない」を生徒・学生が書いた理由によって「b1」と「b2」に分けた。選択肢「b」の回答率は、図表6での「b1」と「b2」の合計である。「b1」は「必要が無いから、勉強したくない」であり、「b2」は「敬語をよく知っているから、勉強の必要性が無い」である。

生徒・学生の敬語に関する知識および意識に関するアンケート調査の結果 (Slyusareva)

< 参考文献 >

メイナード、泉子・K (1997) 『会話分析』 くろしお出版

Elena Slyusareva(2002) 『学校における生徒・学生の対教師敬語表現の研究 新潟市および周辺の小学校、中学校、高等学校、大学での調査結果から』(全 125 頁、付資料頁)新潟大学大学院修士課程 人文科学研究科修士論文、2002 年 1 月提出

Elena Slyusareva(2003) 「学校における生徒の対教師敬語表現使用 新潟市とその周辺にある小学校・中学校・高等学校の調査結果から」(「話しことば」編) 『現代社会文化研究』新潟大学大学院現代文化社会研究科、第 26 号

Elena Slyusareva(2004) 「書き言葉における、生徒の対教師敬語表現について 新潟市とその周辺の小学校・中学校・高等学校、大学での調査結果から - 」 『現代社会文化研究』新潟大学大学院現代文化社会研究科、第 29 号

三輪 正(2000) 『人称詞と敬語』人文書院

主指導教員 (舩城俊太郎教授) 副指導教員 (佐藤芳行教授・大石 強教授)